

続・ふるさと こぼれ話

野仏・甲子大黒天 きのえね

甲子大黒天は町内では聞きなれない野仏で、数も少なく7基しか確認できていない。そのうち1基は、甲子大神を祭ったものである。

「甲子」とは、十干と十二支の組み合わせから成り「甲」は「きのえ」、「子」は「ね」と読む。中国で成立した「五行説」からきており、暦の表示(年月日)に用いられる。甲は十干の初め、子は十二支の初めであるから「甲子の年」といえば一番目の年を示す。一巡するには、10(十干)と12(十二支)の公倍数の60年を要し、60年目に癸亥で終わると、次の年には、再び甲子の年に戻る。子をね

ずみと結び付かせ、ねずみを大黒天の使者とみなして、甲子祭が行われる。町に1基ある甲子大神は明治34年1月に7人の講中で建立した。その他の6基は「大黒天」と刻された文字碑であるが、作製年は甲子の年ばかりではない。中には泣き石大黒天というものもあり、俗に言う世間話の昔話が付いている。

上州屋という醤油製造家があり、店は繁盛していたが、ある年に疫病に襲われ一家が死に絶えてしまい、宅地も家も人手に渡った。その後、当地の柏屋が醤油の株を引き受け営業を始めると、醤油しぼり用に使う男石が昼

第67回

文・大谷津忠一

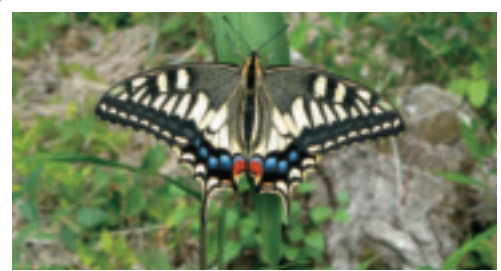


▲甲子大神

夜を問わず泣いていた。そこで易者に頼んで見てもらうと、石は上州屋をしのんで泣いていて、大黒天に祀れば泣きやむと言われた。柏屋は、甲子の年に21人の講中をつくり、男石に「大黒天」の3文字を刻んでお祀りすると、その後は泣きやんだという話である。昭和47年の調査では、八ツ木にも大黒天があったように記録されているが、今行った調査では見つからなかった。



しまたがしの芳賀の自然 19



キアゲハ チョウ目アゲハチョウ科

(写真提供=芳賀町自然に親しむ会)撮影場所:町内
分布=北海道~屋久島
生息地=亜高山帯までの雑木林
時期=3月~10月(発生:3~4回/年)
食性=アザミ科やユリ科の花など
大きさ=開張(羽を広げた最大値)70~90mm
特性=明るい草原的環境を好み尾根筋や山頂に集まる。幼虫はニンジンやパセリなどのセリ科植物を食べる。雄は黄色と黒のコントラストが強く雌は全体的に淡い。夏型は春型よりかなり大きい。

編集後記

□秋らしくなってきました。個人的には「読書の秋」より「食欲の秋」。皆さんも、新米にナシ・クリ・カキと秋の味覚を堪能されていることでしょう。マツタケなんてぜいたくなご家庭も…うらやましいですね。□思い起こせば、

中学生ぐらいまでは毎日のように自分でナシの皮をむいて食べていました。昔ほど果物を食べなくなりましたが、まだ皮をむけるのかなあ。

(Y)



▲マンジュシャゲと稲 (上延生)

■編集 芳賀町広報広聴委員会
☎028(677)6032 ✉kouhou@town.haga.tochigi.jp
■発行 芳賀町企画課
栃木県芳賀郡芳賀町大字祖母井1020番地
■芳賀町ホームページアドレス
http://www.town.haga.tochigi.jp

📱芳賀町の携帯サイトはコチラから➡

